

キャンパスライフにおける問題点から見える学生支援 —問題の洗い出しから具体的な支援まで—

吉田 博

(徳島大学大学開放実践センター)

1. はじめに

2000年にまとめられた文部省高等教育局の報告「大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」（通称「廣中レポート」）において、「学生中心の大学」への方針転換を図ることが指摘された。この背景には、いくつかの要因が挙げられる。大学のユニバーサル化や社会の多様化、変化のスピードに大学が対応できておらず、社会が求める人材と大学が輩出する人材との間には乖離が生じているといった現状である。これらに対応するために、我が国の大学ではさまざまな学生支援の取り組みが行われるようになった。特に、西本(2011)によると、近年の学生支援の特徴として2つが挙げられる。1つは一般学生を対象とした取り組みが多いということである。また、もう1つは、学生による学生支援である。この学生による学生支援は、学生同士の支援であることから、教職員だけではできない支援が日常的に可能であり、さらに支援する学生にとっては他者を支援することで自身の能力を伸ばすことにもつながることが期待できる。徳島大学においても、学生による学生支援チームが誕生し、一般学生を対象とした日常的な学生支援を行っている（吉田ほか2011a；吉田ほか2011b）。しかし、学生による学生支援は、支援する学生の負担やその教育的効果に対する疑問の声がしばしば挙げられる。また、学生による学生支援の取り組みでは、支援する学生に対する教職員の指導や最終的なかじ取り役を行う教職員の必要性が述べられている（佐藤2005；梅村2011）。このように、学生支援の重要性が増す中で、今後は教職員と学生が協力して実施する学生支援の必要性が、高まっていくのではないかと推察できる。

2. 発表の目的

徳島大学では2011年度、学生支援をテーマとしたセミナーを2つ開催した。これらのセミナーでは教員、職員、学生の三者が一同に会して、学生支援に関する問題点の洗い出しや求められる学生支援についてディスカッションが行われた。セミナーにおいて明らかとなった問題点や、ディスカッションから見えてくる学生支援の現状を整理することは、今後の学生支援に関する施策を練る上では有益になると考えられる。そこで、本発表はこれらのセミナーにおけるディスカッション及び、参加者アンケートから明らかになった、徳島大学の学生支援の現状について報告する。本発表が学生支援に対する意識の向上、今後の学生支援の活性化につながることを期待したい。

3. 徳島大学の学生支援に関するセミナー

徳島大学で2011年度に実施した、学生支援に関するセミナーは、9月12日に開催された「平成23年度学生支援担当教職員研究会」（以下研究会）と、11月24日に開催された「平成23年度全学共通教育学生支援フォーラム」（以下フォーラム）である。研究会では、88名の教員、職員、学生が参加し、ディスカッションが行われた。ディスカッションは、それぞれ教員、職員、学生同士3、4名で1つのグループをつくり、徳島大学生のキャンパスライフにおける問題点を話し合い、グループとしての意見をまとめた。その後、各グループの意見を全体で共有し、意見交換を行った（図1）。このとき、学生、教職員自身に関する問題点としては、学生の主体性の欠如や学生と教職員間のコミュニケーションの欠如などが挙げられた。続いて開催されたフォーラムでは、研究会の議論を受けて、学生の主体性向上に焦点

を当て、学生、教職員が参加し、それぞれの立場で取り組むべきことや心がけるべきことについてディスカッションが行われた。詳細については発表の際に示す。

4. 徳島大学の学生支援における問題点

研究会では、学生支援に関するアンケートを実施し、79名の回答を得た。表1は「あなたが考える、徳島大学生のキャンパスライフにおける問題点をできるだけ具体的にお書きください。」という設問の回答に挙げられていた問題点をカテゴリーごとに分類し、回答者の属性ごとに回答数を表したものである(複数の問題点が記載されている回答があったため、回答数の合計は83点となっている)。最も多かった問題点は、施設・設備に関するものであった。これらの問題点を挙げているのは、学生のみであり、体育系のサークル活動を行っている学生の参加者が多かったことも要因として考えられる。これらの意見についても無視することはできないが、ここでは学生、教職員自身に関する問題点に焦点を当てたい。すると、学生と教職員間のコミュニケーションの欠如、支援体制の欠如、学生の主体性・行動力の欠如といった問題点が多く挙げられている。この中で注目すべきことは、学生の主体性・行動力の欠如について、学生からも自らの問題点として挙げられていることがわかる。また、学生と教職員間のコミュニケーションの欠如については、参加した職員のうち半数程度がこの問題点を指摘していることがわかる。

表1 キャンパスライフにおける問題点

カテゴリー	回答数			合計
	教員	職員	学生	
学生の主体性・行動力の欠如	3	1	7	11
支援体制の欠如	5	2	5	12
学生と教職員間コミュニケーションの欠如	1	7	5	13
教職員の教育・学生支援に対する意識の欠如	1	4	3	8
授業における問題	1	0	4	5
教職員・学生が多忙である	6	1	2	9
学生の意見の反映体制の欠如	1	1	0	2
施設・設備に関する問題	0	0	16	16
その他	2	0	5	7
合計	20	16	47	83

5. 考察

今回開催した2つのセミナーは、初めの研究会において問題点の洗い出しを行い、続いて開催したフォーラムでは、研究会で挙げられた問題点や議論を受けてディスカッションを実施した。そのため、フォーラムでは現状に合わせた、具体的な学生支援を議論することができた。今回明らかとなった問題点は、今後も継続的に議論し、学生支援を発展していく必要がある。このような、継続した議論の場を設けることが、教職員と学生間のコミュニケーションの活性化にも寄与することになるのではないかと感じる。

参考文献・資料

- 1) 西本佳代：学生支援活動の全国的特徴，高等教育研究叢書，112，33-42，2011.
- 2) 吉田 博，野中 亮，池内 将：学生による正課外活動，第59回中国・四国地区大学教育研究会プログラム集，7-8，2011a.
- 3) 吉田 博，光宗 榮，野勢祐樹：新入生に対する学生支援，第59回中国・四国地区大学教育研究会プログラム集，8，2011b.
- 4) 佐藤浩章：学生支援策としてのピア・エデュケーションの可能性，現代の高等教育，473，27-31，2005.
- 5) 梅村 修：追手門版学生FDスタッフの活動現状と課題，第16回FDフォーラム報告集，②8-14，2011.



図1 研究会の様子